

解釈のコストに基づく「V スギル」構文の意味決定プロセスについて

鈴木基伸

要旨

本稿では、「すぎる」が動詞に接続した「V スギル」構文についてとりあげ、その意味決定プロセスの解明を試みるものである。「V スギル」構文では、「早く帰りすぎた」「大きな仕事を狙いすぎる」のように、前項動詞を超えた前の要素に超過性の解釈を付与することがある。そこで本稿では、「すぎる」はモダリティ要素を抜いた命題内容全体に超過性の解釈を与えていると考え、《[命題内容] スギル》という文機能モデルを提案する。そしてそこから命題内容中の程度性要素の数だけ解釈の可能性(可能解釈)が導き出され、語用論的な解釈のコストに基づいて、可能解釈の中から最終的な意味が選択されると考える。《[命題内容] スギル》という文機能モデルと解釈のコストという語用論的な枠組みを用いて、「V スギル」構文の意味が決定されるまでのプロセスを提案することが本稿の目的である。

キーワード：「V スギル」構文、超過性、程度性、文機能モデル、解釈のコスト

1. はじめに

動詞性接尾辞「¹⁾すぎる」は形容詞に接続してその様態・属性の程度に超過性の解釈を与えるが、動詞に接続する場合(以下、「V スギル」構文)には、前項動詞を超えて前の副詞や形容詞の解釈に超過性を付与するという特殊な機能をもっており、これまで統語的・語彙的側面からの研究がなされてきた(影山(1993)、影山・由本(1997)、由本(2005)など)。

- (1) ドラッグによって人間の生活が豊かになりうるということが一般的な認識

となっているような、そんな社会を希求する。五百年後くらいに、無理だろうかな。早く生まれすぎたな、俺は。

(『MM 日記』 テイジハルヒト／新風舎)

- (2) このため、育子は地下鉄で一駅離れた自宅から自転車でいったん祖母の家に行き、そこから学校へ通うという毎日だった。「育子を厳しく育てすぎたのかもしれませんが」と母親は言った。

(『学校へ行きたい・行けない・行きたくない』 高木俊一郎 (編)／創元社)

- (3) 絞り開放時にはコントラストが低く、周辺では像が暴れる感じでピントも悪く、フレアも大きい。が、現代のデジタル対応レンズがあまりにもよく写りすぎて面白くないのに対し、このレンズのような「クセ玉」の価値はいま、急上昇中である。(『アサヒカメラ』 2004年4月号／朝日新聞社)

これらは何れも「すぎる」が前項動詞ではなく、その前にある「早く」「厳しく」「よく」という副詞が表す様態の程度に対して超過性の解釈を与えていると考えられ、それぞれ(1)「生まれるのが早すぎた」、(2)「育てるのが厳しすぎた」、(3)「写るのが(写りが)よすぎる」という意味になっている。

また、「V スギル」構文では時に解釈のゆれが生じることがあり、文脈無しには定まった超過性の解釈が得られない場合がある。

- (4) 大きな仕事を狙いすぎると失敗することもある。(益岡・田窪 (1992))
(5) 強く叩きすぎて棒が折れた。

(4) (5) は共に「狙う仕事が大きすぎる」「叩くのが強すぎる」というように、前項動詞を超えた要素に超過性の解釈が及んでいるとも読めるが、一方で、「大きな仕事を狙うこと(回数)が多すぎる」「強く叩くこと(回数)が多すぎる」というような行為そのものを繰り返す回数に対して超過性が及んでいるという解釈も成立しうる。この意味の曖昧性を回避するためには、文脈も含めた解釈決定プロセスの説明を行う必要がある。これまでの先行研究では、(1)～(3)に見られるような、「すぎる」が離れた要素を修飾するという現象の説明はなされているものの、「V スギル」構文における意味の曖昧性について、またその複数ある解釈可能な意味がどのような文脈によって最終的に一つの意味に決定されるのかということについては論じられてこなかった。

そこで本稿では、「V スギル」構文が動詞句や形容詞句、副詞句との関係から解釈に多様性が生じることを前提とし、複数の解釈可能性が生じた際に、どのようなメカ

ニズムによって最終的に聞き手（読み手）による解釈にたどり着くのかという、意味決定プロセスを明らかにすることを目的とする。その道具立てとして、《[命題内容]スギル》という文機能モデルと、語用論における「解釈のコスト」という概念を用いる。第2節で先行研究を概観し、第3節で本稿が用いる文機能モデルについて確認をする。第4節では「すぎる」の超過性解釈が及ぶ命題内容中における程度性について言及し、第5節で「解釈のコスト」を用いた意味決定プロセスの分析を行う。

2. 先行研究

2.1. 由本 (2005)

由本 (2005) は、英語の接頭辞 over- との比較の中で、「両者はいずれも、範疇を超えた広範囲に渡って「過剰」の意味を基体に付加する (p.220)」としつつも、「V + 過ぎる」は over- よりも生産性が高いとし、その根拠を以下の例に求めている。

- (6) a. 私は駅に早く着き過ぎた。(cf. *I overreached the station early.)
 b. 授業を早く終わり過ぎて、職員室にすぐ帰るのは気が引けた。
 (cf. *I overfinished the class early.)
 c. 獲物を遠くから狙い過ぎてはずしてしまった。
 (cf. *I overaimed (at) the game from a distance.)
 d. ポスターを高いところに貼り過ぎた。
 (cf. *I overposted the poster high.) (以上、由本 (2005 : 221))

これらは over- では不可能な、前項動詞を超えた前の要素に「すぎる」の解釈がかかっているものである。また、動詞および名詞に係る修飾語句の有無によって「V スギル」構文はその解釈が異なるが、over-V については解釈の異なりはないとしている。

- (7) a. スープを早く温め過ぎた。(= スープを温めるのが早すぎた)
 b. スープを温め過ぎた。(= スープを熱くし過ぎた)
 c. I overheated the soup (rapidly). (= スープを熱くし過ぎた)
 (8) a. 昨夜は遅くまで飲みすぎた。(= 飲み終わった時間が遅すぎた)
 b. 昨夜は飲み過ぎた。(= 飲んだ量が多すぎた)
 c. I overdrank myself (till late) yesterday. (= 飲んだ量が多すぎた)
 (以上、由本 (2005 : 221))

これ以外にも、「すぎる」は状態動詞や活動動詞とも結合できるという点で over-とは異なっていると述べ、「V スギル」構文の生産性の高さの論拠としている。

また由本は、「すぎる」が「程度性」を含む事象としかなじまない (p.226)」とし、動詞における程度性の判断をするために、Tsuji-mura (2001) の分析を引用しているが、Tsuji-mura が程度性を含まないとしている動詞（「食べる」「憶える」等）についても、「すぎる」が共起可能なことから、「程度性のある動詞を修飾するというよりは、むしろ、どのような動詞も「過ぎる」と結合することで、ある種の「程度性」を帯びるようになる (p.229)」と述べている。そして「すぎる」が、接続する動詞の語彙概念構造 (LCS) に対してどのように作用しているのかを以下のようにまとめた。

- (9) (i) すべての動詞において、主語の修飾語句には「すぎる」の意味作用が及ばない。
- (ii) すべての他動詞において、目的語の修飾語句に「過ぎる」の作用は及ぶ可能性がある。
- (iii) すべての動詞において、動詞句を修飾する程度性のある副詞的要素が共起する場合には優先的にその要素が「すぎる」の意味作用を受ける。
- (iv) 他動詞の目的語と非対格自動詞の主語については、「過ぎる」が数量の過剰の意味を付与する可能性がある。
- (v) 程度性を有する副詞的要素が文中に存在しない場合、「過ぎる」は、
 - (a) 継続相の動詞と結合して行為の時間の過剰を意味する。
 - (b) 反復の解釈が可能な動詞と結合して頻度の過剰を意味する。
 - (c) 対象 (Theme) の状態変化を含意する非対格自動詞や他動詞と結合すると、結果の状態に程度性が認められる場合にはその状態の行き過ぎの解釈が優先され、程度性が認められない場合には対象の数量の過剰の解釈が生じる。
 - (d) 経路を補語とする動詞と結合した場合のみ、主語の数量の過剰を意味する可能性がある。
 - (e) 存在・出現を表す非対格自動詞や所有・作成を表す他動詞と結合すると、前者は主語、後者は目的語の数量の過剰の解釈が優先される。

(由本 (2005 : 243f))

そして、副詞や形容詞などの修飾語句を伴わない場合、「すぎる」は、前接する動詞

の語彙意味内における程度性を持つ要素（①事象が起こった時・空間を特定する働きをになう項 ②結果状態を表す定項 ③事象の程度性に寄与する Theme 項（由本 2005：253））を探し、それに超過性の解釈を与えるとしている。また、程度性を持つ（[+gradable] の素性を持つ）3種類の要素が同時に存在した場合のその優先順位について以下のような例を挙げて述べている。

- (10) a. 水を冷やし過ぎた。②の解釈が最優先（=水が冷たすぎた）
b. 水を冷やし過ぎて、余ってしまった。/水をたくさん冷やし過ぎた。
c. 水を長時間冷やし過ぎた。/水を何度も冷やし過ぎた。
- (11) a. 箱を壊し過ぎた。③の解釈が最優先（=壊した箱が多すぎた）
b. 作品を作り過ぎた。③の解釈（=作った作品が多すぎた）
- (12) a. 山道を歩き過ぎた。②③の解釈が不可なので①の解釈
（=歩いた時間が長すぎた）
b. 遊び過ぎた。②③の解釈が不可なので①の解釈
（=遊んだ時間が長すぎた）

（以上、由本（2005：254））

(10a) のように、「すぎる」に前接する動詞が状態変化を含意する動詞の場合、①～③のような程度性を持つ要素がすべて含まれるが、その際に最優先される解釈は②であるとしている。また、「壊す」「作る」のように結果状態に程度性が認められない（②が無い）場合には、③の解釈が優先される。そして、「歩く」「遊ぶ」のように、②③の解釈が不可能になる場合には、必然的に①の解釈になるとしている。以上をまとめて、語彙意味内における程度性を含む要素の、解釈の優先順序について次のように述べている。

- (13) 「過ぎる」が「過剰」の意味を付与するターゲットを探す場合、最も優先されるのは、結果状態を表す下位事象中の [+gradable] という素性を持つ要素（LCS における定項）、次が事象の程度性を決定する役割を持つ項（LCS 内でも変項）、そして、どちらも無い場合には、事象全体の時空間を決定しているイベント項が選ばれるのである。（由本（2005：255））

以上が、「すぎる」が表す超過性についての語彙的解釈である。既に述べたように、「すぎる」は前接の動詞を超えて前の要素にかかる場合がある。その場合、「すぎる」は動詞の語彙意味を無視しているのであり、この現象を説明するためには統語的制約

を明らかにする必要があるとした。そして、(9)に示した「すぎる」の解釈が及ぶ範囲に基づいて、そのターゲット領域を、生成文法の「統率」という概念を用いて以下のように述べた。

- (14) 「過ぎる」は統語構造内において統率する要素の中から [+gradable] 素性を探し、それをターゲットとして選択する。 (由本 (2005 : 264))

由本は、「V スギル」構文の超過性解釈に関して、語彙的解釈と統語的解釈という2つの側面から説明を試みた。そして最終的に「V スギル」構文における「すぎる」の解釈規則について以下のように述べた。

- (15) 「過ぎる」のターゲットとしては、まず、統語構造上に顕在的に現れている要素の中で [+gradable] 素性が探される。
それが、「過ぎる」に統率されるものならば、そこで選択素性が満たされ、その要素に過剰の意味が付加される。
もし、統語構造上それが見つけられない場合には、最終的に複合する V1 がそのターゲットとして選択される。その結果、今度は、V1 の LCS 内で語彙的解釈メカニズムにもとづいた解釈が行われる。
(由本 (2005 : 267))

2.2. 問題点と本研究の立場

「V スギル」構文の解釈メカニズムを探る上で、語彙部門と統語部門に分けることは、「すぎる」が程度性を持つ要素をターゲットとすることや、前項動詞を超えた前の要素に超過性の解釈を与えるという振る舞いを見れば必要なことであろう。また、複数ある解釈の中で無標の解釈が存在することにも異論はない。しかし無標の解釈があると同時に、文脈操作を伴って可能になる有標の解釈も存在する。例えば以下は(9) (iii) (iv) の主張に反する解釈が成立している例である。

- (16) 太郎は学校に遅く行きすぎて停学処分になった。
(=遅く行く回数が多すぎる)
- (17) 「なんか最近いいことばかり。うまく行きすぎだな。」
(=うまく行く回数が多すぎる)
- (18) 観光客が餌をやりすぎるせいで野犬が激増している。
(=餌をやる観光客が多すぎる)

(19) 最近の子供は携帯を持ちすぎる。(=携帯電話を持つ子供が多すぎる)

(16) (17) は「遅く」「うまく」という副詞と共起しているにもかかわらず、出来事の回数性に超過性の解釈が及んでいる。また、(18) (19) は他動詞の目的語の数量ではなく、主語名詞句の数に超過性の解釈が及んでいると読める。これらの反例は、語彙部門や統語部門から導かれるものではなく、文脈上そのような解釈になるという、語用論的な動機づけによるものである。由本自身も「語用論的推論により主語や目的語の数量の過剰の解釈が導かれる可能性もある (p. 248)」と述べていることから、「V スギル」構文の超過性解釈を行う上で、語彙的、統語的解釈と合わせて、語用論的解釈も必要となることは明らかであろう。

本研究では、由本が示した語彙部門、統語部門における解釈規則の必要性を認めつつ、語用論的なアプローチをもって考察を行う。また、由本は生成文法の立場から統語部門における分析を行っているが、本研究ではそのような立場は取らない。そのかわり、「すぎる」の超過性解釈が命題内容全体に及びうると仮定し、以下のような文機能モデルを提案する。

(20) [命題内容] スギル

これについては次節で詳しく述べる。また、語用論的解釈規則については、加藤 (2003) が示した「解釈のコスト」という概念を用いる。解釈のコスト、またそれを用いた意味決定プロセスについての分析は第5節で行う。

3. 文機能モデル《[命題内容] スギル》について

本研究では、「すぎる」が超過性解釈を付与するのが前項動詞にとどまらないことから《[命題内容] スギル》という文機能モデルを提案する。命題とは、「話し手が外界や内面世界との関係において描き取った、客体的・対象的な出来事や事柄を表した部分」(仁田 2002: 81) であり、文からモダリティ要素を抜き取ったものであると考えられる。「すぎる」と助動詞の関係を眺めてみると、非モダリティ助動詞は「すぎる」に前接し、モダリティ助動詞は後接することがわかる。(21)～(24) は非モダリティ助動詞が、(25)～(30) はモダリティ助動詞が共起している例である。

(21) このとき、高江洲先生が飼い主に向かって、こんなことを言ったのです。
「もう少しだけ、この子の自主性に任せたほうがいいと思いますよ。いろ

いと手をかけられすぎて、窮屈な思いをしているかもしれません」

(『犬と話ができる!』小原田泰久／廣済堂出版)

- (22) しかし、O先生は言い残した。「サウナに入りすぎて、体を乾燥させすぎるのは良くないようです」

(『エリート田舎暮らし』恋沼薫／KTC中央出版)

- (23) アドニスの軽口が、かえって一行の緊張を多少なりとも和ませさえしていた。沈黙のまま進むには、この階段はあまりに暗がりへと伸びていすぎた。

(『ばいばい、アース(下)』冲方丁／角川書店)

- (24) 三月いっぱい定年になるわが身を嘆いた。時間があれば解決できるというものでもないが、じっくりと腰を据えないと解決不可能な事件のように思えた。そのためには、時間がなさすぎた。

(『夜盗』なかにし礼／新潮社)

- (25) ウォーカーは廊下を歩きながら、あまり喜びすぎまいとした。だが、うまくいかなかった。

(『フィレンツェの薔薇』ニーナ・ブルーンズ／ハーレクイン)

- (26) ヤせてはいてもヤセすぎではないと自分では思ってたんだけど、どうやら自衛官になるには貧弱すぎるらしい。

(『笑う入試問題』新保信長／角川書店)

- (27) 男性の平均的な体脂肪率は14%、女性は27%。この、思春期を機に女性だけに増える特有の脂肪の多さは、たくさんのカロリーを必要とする授乳をするための準備だと考えられてきた。しかし現代では、この分析は単純すぎるようだ。

(<https://ovo.kyodo.co.jp/news/culture/a-680447>)

- (28) 葬儀から二週間目の出奔という、気が早すぎるようだが、修三とすればこれでも一杯に譲歩したつもりなのである。

(『善人たちの夜』天藤真／東京創元社)

- (29) 所得税は源泉徴収でちゃんととられているでしょう？あなたが源泉徴収された税金は、多すぎるかもしれないわよ、確かめた？

(『よくわかる税法入門』三木義一／有斐閣)

- (30) ほくだって死ぬのだ。無目的に生きてると人生は長い、目的を持って生きるには短かすぎるのだ。

(『朝日』ともあろうものが。』烏賀陽弘道／徳間書店)

このように、モダリティ助動詞が「すぎる」に後接するということは、それらに超過性解釈が及ぶ可能性が無いことを意味するといつてよい。つまり、「すぎる」はモダ

リティ要素を超過性解釈付与の対象としない。以上のことから、「すぎる」が超過性解釈を与えるのは、文からモダリティ要素を除外した部分、つまり命題内容ではないか、と推測できる。命題内容の定義も含め、本研究の提示する文機能モデルをあらためて示す。

(31) 「V スギル」構文の文機能モデル：[命題内容] スギル

※命題内容：文からモダリティ要素を除外した出来事を表す。

4. 命題内容における程度性

「すぎる」が命題内容全体に超過性解釈を及ぼすとすれば、その中の程度性を持つ要素すべてに超過性解釈が付与されうると考えられる。命題内容、つまり出来事において程度性を示す要素は、①前項動詞 ②名詞句の数 ③副詞句 ④形容詞句が考えられる。以下ではそれぞれの要素が共起する際、どのような解釈が成立するのかを分析する。

4.1. 出来事における程度性

Bolinger (1972) は、程度性を持つか否かで、動詞を程度動詞 (degree verb) と非程度動詞 (nondegree verb) に分類した。程度性とは「とても」「かなり」などによって強調されうる性質のことを指す。Tsujiura (2001) は、Bolinger (1972)、Kennedy and MacNally (1999) を参考に、「とても」と共起可能な動詞として、「苦しむ」「困る」「喜ぶ」「驚く」などの心理動詞 (psych verbs)、「光る」「輝く」「きらめく」「におう」などの放出動詞 (verbs of emission)、「広がる」「狭まる」「温まる」などの対応する形容詞がある状態変化動詞 (change of state verbs: deadjectival verbs)、「変わる」「縮む」「腐る」などの対応する形容詞がない状態変化動詞 (起動相動詞) (change of state verbs: those do not have adjectival counterparts; inchoative) を挙げた。以下に「程度動詞+すぎる」の例を提示する。

(32) 御簾のむこう、几帳をへだてたむこうに、絢姫がいる。その気配を感じるだけで、よかったのに。なのに、一歩を踏みこえたばかりに、わたしたちは苦しみました。

(『なんて素敵にジャパネスク (8)』氷室冴子／集英社)

(33) 研究者とは、常に喜びと落胆を繰り返している。喜びすぎてもいけないし、落胆しすぎてもいけない。(『微生物に学ぶ』白田昭／工業調査会)

- (34) 「わたしが子供の姿なのは、外法とは関係ありません。幼少の頃に父が火事で亡くなり、驚きすぎたために成長が止まったのではないかと、思いますが」
(『外法師冥路の月』毛利志生子／集英社)
- (35) 外国の通関というのはどの国でもあまりかんじのいいものではないが、特にインドやパキスタン、中近東あたりの空港というのは一種異様でブキミな雰囲気である。これはおそらく彼らの目つきが必要以上に光りすぎており、日本ふうにはいわずに険のある目、という状態に近いからであろう。
(『インドでわしも考えた』椎名誠／集英社)
- (36) オフィスで付ける香水は臭いすぎに注意しましょう
(<http://yaziup.com/fashion/perfume/1412>)
- (37) マツイーニ派の運動は、長きにわたって一致団結できなかった。なぜなら、その組織が広がりすぎ、内部に緊張関係が生じていたからである。
(『イタリア史』 スチュアート・ジョーゼフ・ウルフ／法政大学出版局)
- (38) 逆に、落ち着きのないうとき、体が温まりすぎたとき、心を鎮めたいときには、右の鼻孔を押さえて、左鼻孔の陰性の呼吸を繰り返せばいいわけです。
(『人生がうまくいく「呼吸法」』松本幸夫／PHP 研究所)
- (39) 朝と夜で自分の体重が3kg くらい違っています。いくらなんでも変わりすぎだと思うのですがどういうことかわかる方いらっしゃらないですか？
(Yahoo! 知恵袋)
- (40) 先に皮に火を入れてやって、余熱で調理するようにすれば解決されるでしょう。骨が飛び出るのは、加熱のし過ぎで身が縮みすぎてしまったんでしょう。
(Yahoo! 知恵袋)
- (41) 「大御所の側近でな、鳥居躍蔵ってえやつがいるんだが、こいつが男としちゃあ腐りすぎてて食えねえやつさ。」
(『天保冷や酒侍 嵐を呼ぶ刃』菅靖匡／学習研究社)

以上のように、程度動詞と「すぎる」が共起すると、当該の動詞が語彙意味的に程度性を有する部分に焦点が当てられ、超過性の解釈が付与される。

ではこれら程度動詞以外の動詞に程度性が無いかといえばそうではない。例えば、「ころぶ」「見る」などは、「とても」と共起しないため、程度動詞とはいえないが、文体レベルは落ちるものの、「すぎる」を付加して「動きの程度の強調」という解釈が成立する場合もある。

- (42)??とても転んだ。

- (43) ??友達をととも見た。
(44) 【派手に転んだ友人を見て】「ははは、転びすぎだよ！」
(45) 【こちらを凝視している友人に対して】「ちょっとこっち見すぎ！」

このように、数は少ないものの、程度動詞とはいえないが動作そのものに程度性を見いだせるものもあるため、一概に程度動詞か否かを峻別できるわけではない。ゆえに個々の動詞について程度性が認められるかどうかを検証する必要がある。

また、Bolinger (1972) は、程度動詞であっても非程度動詞であっても、つまりすべての動詞において拡張性 (extensibility) があると述べている。この拡張性とは動詞の事態を継続、反復させることにより量的・回数的に拡張可能であるということである。例えば、「食べる」「飲む」などの継続動詞 (他動詞) は、「苦しむ」「広がる」に見られるような程度性はみられないが、動作継続の時間を延長させたり、行為を反復させることにより、目的語の数量や行為の回数といったところに程度性を見いだせるようになる。また自動詞の場合は主語名詞句の数量が拡張部分となり程度性を認めることができる。

- (46) 晩御飯を {30分 / 1時間 / 3時間} 食べた。 【時間的拡張】
(47) ご飯をお茶碗 {1杯 / 3杯 / 5杯} 食べた。 【対象の量的拡張】
(48) ご飯を一日 {3回 / 5回 / 10回} 食べた。 【回数的拡張】
(49) 教室に {1人 / 5人 / 10人} の学生が居る。 【主語名詞句の量的拡張】

以下は、これらの時間的・対象の量的・回数的拡張によって生じた程度性に超過性の解釈が及んでいる「V スギル」構文の例である。

- (50) どれも美味しかったし、楽しかったけど、さすがに長時間食べ過ぎてお腹ばんばんだ。3キロは増えてんなこれ。 (twitter)
(51) 現代人は、おいしいものをたくさん食べ過ぎるから病気が多いとのこと！注意しましょう。 (Yahoo! 知恵袋)
(52) 中学生の娘がいます。お菓子をたくさん食べます。あればあるだけ……。今日は頂き物のお菓子がたくさんあり、弟と二人でポテチ、小さいケーキ、ファミリーパックのチョコアイス。塾から帰ってきて、頂き物のチョコをつまむ。多すぎですよ。……。何回も食べ過ぎ!と言ってるのですが……。体型的にはまだ普通ですが、食べ過ぎが気になります。自分でもグミとかアイスとか買ったりするし……。 (Yahoo! 知恵袋)

- (53) 回想録を書くのはもうやめたくなってきた。かわりに『私の雇った秘書たち』と題して短い読みものを書こうかと思う。秘書に関する限りわたしはついていないようである。ひとりも秘書が居ないときがあるかと思うと次の瞬間には大勢居すぎたりする。

(『茶色の服を着た男』アガサ・クリスティ／ゲーテンベルク21)

このように、「食べる」「居る」は程度動詞ではないが、動詞に内在する拡張性によって時間的・量的・回数的程度が認められるようになる。ただ、「広がる」「光る」などの程度動詞が持つ程度と、拡張によって生じた程度は性質が異なるものであるため、区別して考える必要がある。鈴木(2011)は、程度動詞における程度性と、非程度動詞の拡張によって生じた程度性とを区別し、前者を「純粹程度性」、後者を「量程度性」とし、さらに、量程度性に関しては①達成量②持続時間③回数という下位分類があることを示した。本稿でも鈴木(2011)に従い、動詞(出来事)における程度性を以下のように分類する。

表1. 動詞の程度性分類

動詞の程度性	純粹程度性	
	量程度性(拡張程度)	時間的程度
		(主語・目的語の)量的程度
		回数的程度

4.2. 名詞句の複数性

前小節で見た量程度性の中の量的程度は、主語または目的語となるべき名詞句の数量が関係する。例えば、数量詞等によって主語・目的語名詞句の数量が限定されている場合、量を表す副詞²⁾を共起させることはできない。

- (54) ??学生が一人大勢居る。
 (55) ??食パンを一枚たくさん食べた。
 (56) ??お茶を一杯たくさん飲んだ。
 (57) ??グラウンドを一周いっぱい走った。

これらの不自然さは、数量を表す要素が二つあるため衝突してしまうためだと考えられるが、それ以前に、「一人」「一枚」「一杯」「一周」という数量詞が複数性を否定してしまうため、「大勢」「たくさん」「いっぱい」という量を表す副詞と意味上相容れ

なくなってしまうことに不自然さの原因があるといえる。したがって、動詞における量程度性の有無を判断する場合、主語・目的語名詞句の複数性を考慮に入れる必要がある。

4.3. 副詞句の程度性

「早く」「簡単に」などは「非常に」「とても」などの純粹程度を表す副詞によって修飾されうするため、程度性が認められる副詞であるといえる。事実、由本（2005）の分析にあるように、「早く食べすぎる」「簡単にやりすぎる」などという場合、「すぎる」の超過性が「早く」「簡単に」という副詞に及んでおり、さらにそのような解釈が、動詞が表す程度性にかかる解釈よりも優先されるといえる。

(58) スープを早く温め過ぎた。(=スープを温めるのが早すぎた) ((7a)再掲)

(59) 昨夜は遅くまで飲みすぎた。(=飲み終わった時間が遅すぎた)

((8a)再掲)

したがって、動詞を修飾する副詞句が「V スギル」構文内に存在する場合は、その命題内容における程度性の中で最も優先して超過性の解釈が与えられる対象であるといえる。しかし一概に副詞といってもすべての副詞が超過性解釈の対象となるわけではない。すでにのべたように、命題内容からはモダリティ要素が除外されるため、「たぶん」「おそらく」「ひょっとしたら」などのモダリティ副詞には超過性解釈が及ばない。これは、そもそも「*たぶんすぎる」「*おそらくすぎる」「*ひょっとしたらすぎる」という形式が存在しないことから判断できるであろう。

また、モダリティ副詞でなくとも、「非常に」「もっと」などによって修飾できない、「すっかり」「全然」「決して」などの極性を表す副詞には程度性が存在しないため超過性の解釈は及ばない。したがって、命題内容において超過性の解釈が及ぶ副詞は、純粹程度を表す副詞（「非常に」、「とても」、「大変（に）」、「すこぶる」、「たいそう」等）によって修飾されうる一部の程度副詞のみである。

4.4. 形容詞の程度性

加藤（2003：22）は「日本語の形容詞はすべて程度性を有する」と述べており、形容詞も副詞同様、「すぎる」の超過性解釈の対象となりうる。しかし副詞とは異なり、超過性の解釈において文中の形容詞が必ずしも他の要素に比べて優先されるわけではない。例えば「大きな仕事を狙いすぎる」(=(4))は「狙う仕事が大きすぎる」という解釈と、「大きな仕事を狙う回数が多すぎる」という解釈とでは、どちらか一方

が優先定位に解釈されるとはいいい難く、解釈の優先性という意味では「副詞+動詞+すぎる」とは扱いが異なる。

また、主語名詞句の形容詞には主節動詞句内の「すぎる」の超過性解釈は及ばない。これは由本(2005)も指摘している。由本(2005)は統語構造からこの現象を説明しているが、本研究では文機能モデルから説明できると考える。本論が提案する文機能モデルは、『[命題内容]スギル』であるが、これは出来事そのものに超過性を付与することと同意である。出来事とは動詞句を中心に成立するため、動詞の作用が及ぶ目的語項を修飾する形容詞に超過性解釈が及べば、出来事そのものに超過性の解釈が及んでいられる。しかし主語名詞句を修飾する形容詞、たとえば「背の高い太郎が」の「高い」に超過性解釈を付与し、「背の高すぎる太郎が」としても、それはあくまで主語名詞句の状態の超過性であり、出来事そのものの超過性とは異なる。したがって、「すぎる」の超過性解釈が及ぶのは、あくまで動詞によって回数や程度が変化する動詞句内に限られ、主語名詞句の修飾句への超過性は及ばないと考えられる。

5. 解釈のコストによる超過性解釈

前節において、「すぎる」が超過性の解釈を及ぼしうる、命題内容における程度性要素について確認した。命題内容における程度性要素の数に応じて超過性の解釈が成立するといえる。すでに確認したように、優先的に選択される解釈もあるが、最終的にどのような解釈になるのかは文脈から判断する必要がある。複数ある解釈の中から1つの解釈に限定される際のメカニズムとして、加藤(2003)は「解釈のコスト」という概念を用いて以下のように説明している。

- (60) 解釈を成立させるために負担しなければいけない知的処理作業を数量的に捉えて、解釈のコスト (interpretation cost) と呼ぶ。意味的に無標の解釈を行う場合は、当然のことながら解釈のコストは最も小さい。解釈のコストが大きい解釈は意味的に有標である。1つの言語形式にいくつかの解釈があり得る場合は、解釈のコストが小さい解釈が優先される。解釈のコストが高くなればなるほど解釈は優先されないのであり、解釈を成立させるためのコストが一定の度合いを超えて大きくなれば、それは非文となる。(加藤(2003: xv))

そして解釈のコストの原則について以下のように述べている。

(61) 解釈のコストの原則

ある言語形式の解釈の成立に必要なコストが小さければ、それはより優先される解釈となる。一方、解釈のコストが大きければ、それは優先されない解釈となり、その解釈を成立させるには、一定の負担が必要になる。しかし、解釈のコストが限界を超えて大きくなれば、その言語形式は非文となる。(加藤 2003: xvi)

以下では、文機能モデルと解釈のコストに従って「V スギル」構文の意味決定プロセスについて分析を行う。まず、文脈を伴わない(4)を文機能モデルに当てはめて考えてみよう。

(62) 大きな仕事を狙いすぎると失敗することもある。((4)再掲)

(63) [大きな仕事を狙う] スギル

「誰かが大きな仕事を狙う」という命題内容に超過性が付与されると考えると、「大きな」という連体詞は程度性を持つため「大きすぎる」という意味に、また出来事の回数も程度性(量程度性)を持つため「狙うことが多すぎる」という意味にもなりうる。したがって(62)には、2つの解釈の可能性(可能解釈)がある。そして解釈のコストを考えると、発話者が、過去に大きな(大きすぎる)仕事を狙って、失敗した経験があることを聞き手が知っていれば、「大きすぎる」という解釈の方が「多すぎる」という解釈よりはコストが低いといえる。一方、発話者が常に大きな仕事ばかり狙っていて、たびたび失敗しているという情報を聞き手が世界知識として有していれば、両解釈におけるコストの関係は反対となる。しかしながら、(62)において発話者の具体的な情報または両解釈におけるコストの優劣を決定づけるような情報が示されていないため、文意を特定することができない。したがって(62)には超過性の解釈における曖昧性が生じてしまっている。

このように文脈を伴わないと、命題内容の程度性要素の数に応じた可能解釈がそのまま残ってしまうことがある。以下では、文脈から解釈が限定されている例を観察する。

(64) 【ホームページのタイトルと説明文】

[タイトル]

冷凍庫開け過ぎ注意! Fridgeezoo とガリガリ君コラボ 「ガリガリ君」が冷蔵庫の見張り番に

[説明文]

冷凍庫を開けすぎた時に知らせてくれる Fridgeezoo という商品があるようなのですが、アイスクャンディで有名な【ガリガリ君】とコラボしたようで、あの「ガリガリ君」が冷蔵庫の見張り番にという記事が報道されています。(http://osakeyasan.blog.fc2.com/blog-entry-1125.html)

この例文の文機能モデルと可能解釈は以下のようになる。

- (65) [冷凍庫を開ける] スギル
(66) ①冷凍庫の数量超過
②開ける程度の超過
③開ける時間の超過
④開ける回数の超過

これを解釈のコストに基づいて分析すると、まず、①の解釈はかなりコストが高い。なぜならば、(冷蔵庫についての) 冷凍庫を一人何台も持つことはなく、通常は各家庭に一台であるというのが我々の持つ世界知識の中にある情報だからである。したがって「何台もの冷蔵庫を開け過ぎる」という解釈にはなりにくい。

また、「開ける」は状態の変化を引き起こす動詞であるため程度動詞であり、純粹程度性を有する。したがって「開ける程度の超過」という解釈が成立する。ではこの解釈のコストが低いかといえばそうではない。冷凍庫から食材等を取り出すとき、どれだけ開けたら開けすぎなのかという一般的な基準を我々は有していない。また、大きく開けた場合は小さく開けた場合に比べて冷気の流出が大きいいため、その分の電気代の損失は生じるが、取り出す物の大きさに応じて開ける必要があるため、任意的に変えることができない。そのため②の解釈はややコストが高いといえる。

一方、③の「開ける時間の超過」という解釈は、コストが低いといえる。なぜなら、冷凍庫から物を取り出した際に、取り出した物をキッチンテーブルに置いて次の作業に取り掛かってしまうことによって扉を閉め忘れ、開ける時間が超過することは一般的に想定可能な状況だからである。事実、一般家庭用冷蔵庫には、長時間扉を開けていると警報ブザーが鳴る装置が組み込まれていることが多い。また長時間開けることにより冷気が流出し、電気代の損失につながるため、「注意!」「見張り番」という文脈上のキーワードとも合致する。ゆえに、③の解釈は①②と比較して解釈のコストが低い。

④は開ける回数の超過であり、「何回も開ける」という解釈であるが、これも比較

的解釈のコストは低いといえる。何回も必要以上に冷凍庫を開ければ③の解釈と同様、冷気の流出によるデメリットがもたらされるため、「注意」「見張り番」というキーワードに合致するが、何回以上開けたら注意の対象となるのかは判断しにくい。したがって①②の解釈よりコストは低いが、③と比較すると高いといえる。以上の考察から、(66)における解釈の中で最もコストが低いのは③の解釈であり、それが聞き手にとっての最終的な解釈となっていると考えられる。

次に、(64)と同じ「開ける」という動詞が用いられており、異なった意味決定プロセスをたどっている例を示す。

- (67) 皆さんに質問です。女性の耳に、ピアスの穴が何個以上あると「それって、あけすぎじゃないの!？」と思いますか？出来れば、回答して下さった方の年齢も知りたいので、年齢も記入してくれるとありがたいです。ちなみに私は28歳で、両耳合わせて4つ穴があいています。 (Yahoo!知恵袋)

(67) の文機能モデルと可能解釈は以下ようになる。

- (68) [女性が耳にピアスの穴をあける] スギル
(69) ①ピアスの穴をあける人の数量超過
②ピアスの穴をあける大きさの程度超過
③ピアスの穴をあける時間の超過
④ピアスの穴をあける数量の超過

①は、「あける人が多すぎる」という解釈であるが、この文脈では、主語名詞句が単数に限定されていることがわかるため、コストが高く棄却される。②は、「ピアスの穴が大きすぎる」という解釈であるが、前文脈で、「ピアスの穴が何個以上ある」とあることから、大きさの程度に対する超過ではないことがわかる。それと同時に④の解釈がこの場合最もコストが低いことも明らかになる。③の解釈は、可能性がなくはないが、ピアスの穴というものが、一定の期間を置いた後に塞ぐものである、という世界知識を有していない以上、解釈のコストは高く、最終的に決定される解釈とはいえない。以上のような意味決定プロセスを経て、(67)は④の解釈となる。

次に、動詞を修飾する副詞句を伴った例を挙げる。

- (70) 「きのうは早く帰りすぎて、どうにも人間の食べそうもないものを食わせる羽目になった。ふうなだったらまだましだったんだろうが、今日は

ちゃんとした人間の食えるものを食べたいもんだ」イーだ、とにいなは父、
剛宣に向かって舌を出した。 (『恋句』西山裕貴／郁朋社)

(70) の文機能モデルと可能解釈は以下のようになる。

- (71) [早く帰る] スギル
- (72) ①副詞「早く」の超過
- ②「早く帰る」の回数超過

文中に「きのうは」とあることから②の回数超過と解釈するためには、「一日に何回も家に帰る機会がある」という特殊な文脈が必要になるため、解釈のコストが高いといえる。したがって、この場合、①の「帰るのが早すぎた」という解釈が適切となる。以下の例は文機能モデル、可能解釈共に (70) と同じものである。

- (73) はいげにう s です。3限授業は楽でいいですねー。今日はずっとうちにいました。早くに家に帰ると置いてある本とかを結構暇で読んでしまうんですが、最近早く帰り過ぎてそれも飽きてきた感じが…。だんだん読むものも減ってきてしまったが、だがそんな中でも FF12アルティマニアだけは開いたら負けかなと思っている。

(楽天ブログ <http://plaza.rakuten.co.jp/geniuss/diary/200803240000/>)

(73) が (70) と異なるのは、「早く帰る」という出来事が起きたのが一回ではないということである。それは、「最近」という文中要素によって保障されている。つまり、ここでは行為の反復が含意されているのであり、それによって超過性の解釈が出来事の繰り返しの回数に及び、「早く帰ることが多すぎる」という解釈になりうることを意味している。実際、そのような解釈をしてもコストは高いとはいえない。前文脈において、「早くに家に帰ると置いてある本とかを結構暇で読んでしまう」とあり、後文脈において「それも飽きてきた感じが」とあることから、早く帰ることが繰り返されることによって読書量が増え、飽きが生じるのだと解釈することは、コストが高いとはいえないだろう。一方、「早く」に超過性の解釈が及び、「帰るのが早すぎて」という読みも可能であり、解釈のコストも低いといえるため、(73) では「V スギル」構文に可能解釈が二つあり、両者の解釈のコストは同程度だといえる。このため、解釈の曖昧性が生じてしまっている。

6. まとめと今後の課題

本稿では、「V スギル」構文の超過性解釈に焦点を当て、《[命題内容] スギル》という文機能モデルと、「解釈のコスト」という語用論的な枠組みを用いて、その意味決定プロセスを明らかにすることを目的とし、論を進めてきた。これまでの研究においては、最終的な「V スギル」構文の意味が1つしかないという前提にたって論じられてきたが、本研究においては、命題内容中の程度性要素の数だけ可能解釈が存在しうるとし、最終的な意味決定は語用論的な動機づけによってなされるという立場をとった。これは、先行研究を否定するものではなく、新たな枠組みを用いることによって、新しい「V スギル」構文研究の可能性を見出すことができたと考えたい。

文機能モデルの妥当性や、程度性の分類についてはまだまだ検証の余地があろう。また、解釈のコストを利用した「V スギル」構文の分析についても、もっと多くの動詞について行う必要がある。また、「V スギル」構文の構文バリエーションも考えられるため、各バリエーションについての意味決定プロセスの解明が求められる。本稿が抱えた課題が数多くあるが、それらは今後少しずつ解決していく予定である。

注

- 1) 形容動詞（ナ形容詞）も含める。
- 2) 工藤（1983）は、量を表す副詞として以下の3種を挙げた。
量副詞—たくさん、いっぱい、残らず、たっぷり、どっさり、ふんだんに
概括量副詞—ほとんど、ほぼ、だいたい、おおむね、おおよそ
数量詞—全部、全員、大部分、あらかた、半分、少数、二つ、三人、四個、すべて、みんな
- 3) 連体詞「大きな」「小さな」も含める。

参考文献

1. 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房。
2. 影山太郎・由本陽子（1997）『日英語比較選書8 語形成と概念構造』研究社。
3. 加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房。
4. 工藤浩（1983）「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』渡辺実（編）明治書院。
5. 鈴木基伸（2011）『程度性からの意味論』博士論文、名古屋大学。
6. 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（2000）『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店。
7. 仁田義雄（2002）『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版。
8. 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版。
9. 由本陽子（2005）『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房。
10. Bolinger, Dwight (1972) *Degree words*, The Hague : Mouton.
11. Natsuko, Tsujimura (2001) "Degree words and scalar structure in Japanese", *Lingua* 111, 29-52.